

福祉のひろば 8

2017

特集

わらじ医者（早川一光さん）の戦争体験

軍隊の命令で、僕が医学生の時、焼夷弾から守るために、
京都市内の家々の天井板を剥がした

トーク 福島で被災した医師が伝えたいこと（種市靖行さん）



住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083

京都市中京区三条柳馬場東入中之町10

代表取締役社長 川下 晃正

TEL (075) 211-7277

FAX (075) 211-7270

<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

総合社会福祉研究所2017年会員の集い案内

日時：2017年8月26日〈土曜日〉午前10：30～12：30

会場：名古屋市立大学滝子キャンパス2号館

次第：開会挨拶 石倉康次 理事長（立命館大学）

第一部 2016年度事業報告及び2017年度事業計画提案

黒田孝彦 事務局長

第二部 小川政亮先生が遺されたもの〈発言者予定〉

永岡正己 理事（日本福祉大学）

垣内国光 理事（明星大学）

河合克義 理事（明治学院大学）

唐鎌直義 理事（立命館大学）

閉会挨拶 濱岡政好 副理事長（佛教大学名誉教授）

総合社会福祉研究所

TEL06-6779-4894 <http://www.sosyaken.jp/>

FAX06-6779-4895 E-mail:mail@sosyaken.jp

あたらしい乳児院に 子どもたちといっしょに移ります



すみれ乳児院から、くるみ乳児院（定員18名）に移ります。いまからみんなで出発です。
当初はベビーカーで移動する予定でしたが、猛暑のため、マイクロバス移動に切り替えました。すみれ乳児院は、老朽化のなかで、二か所（35名定員の新しいすみれ乳児院）と、くるみ乳児院（定員18名）に変わります。真あたらしい施設に、早くなじんで安心して過ごせる居場所になってほしいと思います。



子どもたちが新しい乳児院に早く慣れ、そこでの生活が子どもたちにとって快適に過ごせるものになるように、職員は移動する前からお散歩時に立ち寄りたり、新しい施設のことを絵本にしてお話しして聞かせます。もともと、子どもたちが児童養護施設等に移動する措置変更のとき、スムーズな移動ができるように、ていねいに事前説明をしてきました。まだ文字が読めなくても、子どもたちに向き合えることはたくさんあります。

多くの乳児院や小児病棟、最近では乳幼児保育施設でも導入されている「BABY SENSE」は、^{ベビーセンサー}SIDS（乳幼児突然死症候群）防止の感知センサーです。SIDSの発生につながる無呼吸状態が発生するとアラームが鳴り、職員に知らせます。子どもの動きが停止したとき、または毎分10未満のミクロの動きを検出した場合も警告アラームが鳴ります。夜勤の体制だけでなく、乳幼児の見守りは日常的に重要です。安全確保の面からも設置補助などが求められます。





あたらしい施設に着いて、さっそくユニットのお部屋に入りました。洗面所やトイレ、お風呂、そして食事をする場所もユニットごとにあります。ここが、ぼくたちのお部屋です。職員も子どもたちもいっしょにスタートです。

小さな手洗い、小さなトイレ、小さな身体に大きな思い出が、ここで育まれることを願ってやみません。

【ひろばトーク】

東電原発事故から6年

——福島で被災した医師が伝えたいこと

種市 靖行 6

福祉のひろば

2017年8月号

●特集● わらじ医者（早川一光さん）の戦争体験

私の戦争体験～わらじ医者・早川一光が若者に語る～	10
日本の空襲、京都の空襲	22

●トピックス●

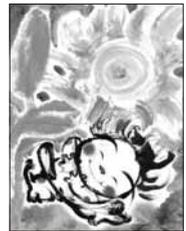
すみれ乳児院が二つに分かれ、新しく出発します。	26
社会と大人への信頼をとりもどし、明日を信じて生きていく 子どもたちを育てたい	平瀬真理子 30
児童養護施設や乳児院の政策動向の変化から考える	32
戦争マラリアから与那国島を考える〈与那国シリーズ3〉	38
「ハンセン病フォーラムそれでも人生にイエスか」に参加して～ 小川政亮略歴	44 48
～社会福祉運動を未来に継承する～ 第1回「継承研」が開催されました	50
「悲田院ふくしアカデミア」開催のお知らせ	51
第23回社会福祉研究交流集会 in 東海でお会いしましょう 木戸利秋	52

●連載●

施設から子どもたちの未来をきりひろく

子どもたちのかかえる悩みや課題と向き合って	今崎 佑介 58
相談室の窓から	
ご両親を拒否するK男さん（2）	青木 道忠 62
育つ風景 そんなことするのは、なに組さん？	清水 玲子 64
「助けて！」って言ってもええねんで！	徳丸ゆき子 66
ポカポカとあたたかい光があたるようなアクションに	
全盲夫婦の出会いから 二人三脚のあゆみ	千田勝夫・網枝 68
二人三脚のはじまり（2）三人の息子たち	
映画案内 『ルーム』	吉村 英夫 70
現代の貧困を訪ねて	
「ホームレス自立支援法」の10年間延長	生田 武志 72
似らすとれーしょん道場 似顔絵まんがアート	
スポーツ選手を描くのじゃ～！（その2）	ラッキー植松 74
ホームレスから日本を見れば	ありむら潜 76
花咲け！男やもめ	川口モトコ 77

●表紙の絵● 神門やす子



みんなのポスト 56 / 福祉の動き 78 / 今月の本棚 81 /

●グラビア● あたらしい乳児院に

子どもたちといっしょに移ります

東電原発事故から6年

——福島で被災した医師が 伝えたいこと

たねいち 種市 やすゆき 靖行さん

現地に行ったからと言って、原発の敷地内で何が起こっているか、現地の人々が何を悩んでいるのか、まったくわかりません。福島原発事故の状況や影響を知るといことは、それぞれが自分で考えて、自分で情報を収集するしかないと思います。今回は、福島県郡山市で被災した一開業医の視点からの情報をお伝えしますが、それをもとに自分から情報を取りに行く努力を開始していただきたいと考えています。そして、あなたのできる範囲でよいので、未来に対して何らかの行動を起こすきっかけになるように、と願っています。

被災当時、私は四六歳、三人の娘と妻の五人暮らしでした。郡山市内で、整形外科診療所を開業していましたが、翌年二月に閉院し、四月、家族がまず先に石川県に移住し、私は閉院対応のため、その二年半後に移り住みました。原発事故被災地の医師として、放射能の汚染状況とその危険性について、周辺住民と話し合う活動や市民主体の健康相談会等に参加して来ました。以前より自主甲状腺超音波検診もしていましたが、現在は県民健康調査センターの資格を取得し、県民健康調査の甲状腺エコー出張検査にも参加しています。

本来は一〇〇万人に二〜三人、と言われていた小児甲状腺がんが、福島では合計一九一名の悪性・悪性の疑いのある患者が発見されています（一名は良性腫瘍）。学校給食に福島産の食材を提供するのは、福島の子どもたちが食べれば安全性を全国にアピールできる。二〇一四年から食品購入費という補助金を出すことになったり、安全性をアピールするために海開きに子どもたちが遊ぶポスターがつくられたり、子どもの命や健康が問われるようなことが起こっている



たねいち やすゆき

整形外科医師、金沢市在住、原発・いのち・みらい—石川県保険医協会プロジェクトメンバー、福島県県民健康調査「甲状腺超音波検査」認定検査者。

郡山市で開業6年目に東日本大震災・原発事故発生、その後、診療所を閉院し、石川県に移住。現在も福島県に頻繁に通い、子どもたちの甲状腺超音波検診をおこなう。

ます。かたや、D^{ディ}M^{マト}A^{ット}Tの隊員には、福島県に泊まらない、福島県の食材も口にしないように指示されていたようです。（※D^{ディ}M^{マト}A^{ット}T：災害急性期に活動できる機動性をもったトレーニングを受けた医療チームのこと）。

福島を中心とした東日本が放射能で汚染されてしまったのは、非常に悲しいことです。しかし、福島県の農林水産業を守るために、それらをなかつたこととして「風評被害」とかたづけられてよいものなのでしょうか？「絆」という言葉をもとに、日本全体で被曝を受け入れるべきものなのでしょうか？

本来ならば東京電力福島第一原発事故により、大変な汚染地区が生じてしまい、今までの法律が通用しない状況になっている現在、おこなわなければならないことは、その反省と対策。そして悲しい原発事故があり、大変な被害を被^ひつたが、それを契機に日本が良い方向に変わっていくかなければならないと思います。現在の政権が原発事故自体の問題点を解決しないまま、再稼動を進めようとしている状況がまったく理解できません。被曝してしまった人々や被曝しつつある日本全国の人々、現在も避難生活を続けている強制避難区域の人々にとって、まったく納得できる話ではありません。この現状を変えるためには、人々が政治に興味をもち、世の中を変えていくしかないと思います。将来の子どもたちのためによく考えなければならない時期に来ていると思います。

（石川県保険医協会主催の講演会（六月二九日）での講演概要と種市さんのメッセージを、ご本人の了解のもと、掲載しました）

特集

わらじ医者(早川一光さん)の戦争体験

軍隊の命令で、僕が医学生の時、焼夷弾から民家を守るために、
京都市内の家々の天井板を剥がした

早川一光さん(九三歳)がこれまで生きてこられた道、その道のなかで、
戦争の時代はどのような道程どうしてだったのでしょうか。

昨年八月、幸恵夫人の誕生日までに発刊したいと願ってつくられた『寒月』は、わらじ医者わらじいしやの女房がわらじ医者と共に体験したこと、共に在宅医療を支え、地域の人々と過ごしてこられた体験をもとに作成されました。この『寒月』のなかでも、若い夫婦が間借りの狭い家に住んでいた時、夜中、天井裏から幸恵さんの額に子鼠ねずみが落ちてきた話が紹介されていました。どうして天井板がなかったのか。早川一光さんや幸恵さんから、ぜひその背景や京都での戦争体験を読者のみなさんに伝えようと、若い方々にも参加していただいて、お話を伺うことにしました。

実は、その前にこんなことがあります。早川さんの自宅近くに立命館大学衣笠キャンパスがあります。そこで今年も社会福祉概論の講義の一コマに早川さんが登場することになりました。五月、早川さんは百数十名の学生を前に自らの体験や、命、福祉に対する考えを紹介されました。特に、すべての命は平等、それは天皇たつて同じ。人の生活行為からみても同じ、という話も考えておられました。しかし、限られた時間のなかで、早川さんの体調もあったのですが、ご自分の思いを十分語るができなかったのです。

